

「普通」とは

小坂中学校 三年 鈴木 楓佳

「普通においしい」「普通に考えて」私たちが普段生活している中でよく耳にする「普通」という言葉。では、「普通」とは誰が決めたもので、どのような基準なのでしょう。

私は、幼い頃から少食であることが大きなコンプレックスでした。学校給食で、クラスの間と同じ量を食べきれず、残すことが何度もありました。担任の先生に、残すことを注意され、今まで食べることができたはずの量が食べきれない自分がとても悔しかったです。さらに、友達にも残すとき「なんで残すの?」と聞かれたことがありました。その子は、悪気はなかったのかもしれませんが、残すのが億劫だった私にとって、うまく伝えることができず、適当にごまかすことしかできませんでした。周りからの「普通の量」のプレッシャーにより、食べ物がかうまくのどを通らず、美味しかったはずの給食がおいしいと思えなくなりました。たしかに、残さず食べることは、食品ロスを防ぐために大切なことではあると思います。それでも、人によって食べる量には個人差があります。それぞれ違った事情があります。それらは、社会の「普通」を基準としたものの一つではないかと感じました。世の中には私のように給食を残すことについて悩みをもっている人がいると思います。

また、私はバラエティ番組が大好きで毎晩家族みんなで観ています。その中には、髪色や髪型が派手な人、男性なのに女装をしている人、たくさん整形をしている人などいろいろな個性をもった人がいました。みんな、私の身近な所にいないような人たちだったので、内心「変な人」と思ってしまったことがありました。そのとき、私自身も芸能人と同じように、周りからいつも給食を残す「変な人」というイメージをもたれていたのではないかと想像しました。芸能人にも私にも、そういった個性があります。その個性を偏った考えや勝手な言葉で否定するのが一番相手を傷つけることだと思います。そのように思えたからこそ、自分と相手の個性の大切さを意識することができました。

この2つの体験から、「普通」を比べる側と比べられる側の立場に立ち、お互いの内面までくみ取り、些細なことでもすれ違いが起こり得ると気付きました。一人ひとりが生まれ育った環境や経験によって、その人独自の「普通」が存在しています。世間でいう「普通」ということが必ずしも正しいわけではないと思います。

近い未来、それぞれの立場や個性が認められる社会になることが今の私の願いです。今日という日まで苦しいことがたくさんありました。しかし、どんな思い出も受け入れ、今では約二年ぶりにクラスの間と肩を並べて給食を食べることができています。もちろん初めは周りの視線が怖くて、一口食べることも勇気が必要でした。たくさんの感情が入り混じり、涙が溢れ出すこともありました。しかし、自分が成長できていることの喜びが大きく、世界に一つだけの私の個性が好きになれました。そう思えるようになったのは、私の「普通」を受け入れてくれる仲間、そして支え続けてくれた家族、先生がいたからです。私が変われたのも、みんなが私の背中を押してくれたからです。一分一秒でもみんなの期待に応えたいと思いました。この経験があったからこそ今の私がいます。みなさんもどんなに今の自分が嫌だったとしても世界で一つしかない自分だけの個性を認め、大切にしていってください。そして、同じように自分を大切にしてくれている周りの人たちの個性も大事にしていってほしいです。社会から少しでも偏見が減り、お互いに「普通」を認め合えるような世の中になっていくこと。これが私の「普通」の主張です。